

南北文化の邂逅地 与那国島における人類起源神話伝説の比較研究

黄 智 慧

(森田健嗣・石村明子訳)

要旨：琉球と台湾は密接な結びつきがあるものの、台湾の諸民族との比較という視点が欠けていた。筆者は八重山群島の中でも台湾に最も近い与那国島での調査に基づいて、島に伝わる神話伝説の分析を行い、台湾・沖縄間の関連性について考察する。本論文では、与那国島の社会生活の文脈における伝承状況を示したうえで、島に伝わる 4 つの人類起源伝説神話について、台湾との比較を行う。(1) 人類南方起源の「ていだん・どうぐる」伝説と、台湾の「スナサイ伝説」との比較。(2) 大災害から生き残った「どなだ・あぶ」伝説の「兄妹婚型」要素、「ながま・すに」伝説の母系継承の要素と、台湾東部の諸民族の神話伝説との比較。(3) 人々が北から漂流してきたという「犬がん」伝説と、台湾及び華南の神話の比較。与那国島で伝承される人類起源神話伝説には、北方の神話と、南方の伝説の二つの系統が並存している。筆者は、与那国島におけるこれら二つの流れの並存状態の分析を通じて、いわゆる「東台湾海」地域島嶼文化の広域性を裏付けることができると考える。

[キーワード：黒潮、環東台湾海、スナサイ伝説、与那国島、犬婿伝説]

はじめに：台湾と沖縄の関連

長きにわたり、台湾において民族学調査に携わってきたのは、その多くが日本の民族学者であり、皆台湾・沖縄間における民族学上のつながりへの関心をもっていた。伊能嘉矩、鳥居龍藏にはじまり、移川子之蔵、馬淵東一、金闇丈夫、国分直一ら¹⁾は、考古学的調査や身体測量、神話伝説およびその他諸々の文化的要素の比較を通じて、台湾・沖縄間の結びつきを見出そうとし、さらには北方の日本文化とのつながりや、環東アジア外海の島々の連鎖という全体を述べようと試みてきた。

こうした関心を生む単純かつ最も重要な要因とは、各島間の地理上の距離の近さや、西

太平洋環流である黒潮流域に同じく位置する、ということである。とくに弓なりの形をした琉球諸島で最も南西端にある八重山群島は、緯度が台北よりさらに南であり、距離にして台湾島から 100 キロ足らずの宜蘭東方の外海に位置する。台湾の東海岸と同様に、八重山群島も黒潮の流れが通る地である。近代国家形成以前には、人々の間の移動は国境線という制限を受けず、ある程度の航海技術さえ身に付けていれば、南から北への黒潮海流に乗ることで、互いの移動は十分に可能だった。

この仮説を立証するため、1977 年初夏、「黒潮文化の会」という研究団体が古代ミクロネシアの遠洋帆船を模して、機械動力にたよらない帆船を作り²⁾、黒潮航路を進むという実験を行った。その「野性号」と命名された帆船は、5 月 29 日にフィリピンのバタン島を出発後、翌日には台湾東部海上の蘭嶼島の東を通過し³⁾、風力と海の流れに乗って、5 日後（6 月 3 日）には、まず沖縄最西端の与那国島に到達した。その後、八重山島などへと航路を進め、那覇を経て、九州南端の鹿児島に着いた。この航海実験の結果は、黒潮流域内において人々の移動や交流は決して難しいことではないことを証明している。よって途中、台湾東部沿岸に立ち寄ったり上陸したりする機会が少ないと言えず、台湾・沖縄間の人々の移動つながりを考えることは、学術上きわめて意義のある課題であると言える。

だが、この意義ある課題に挑む研究者らは、歴史文献上の難題へ直面することに気がつく。15 世紀からの琉球王国の海上貿易はかなり活発であり⁴⁾、琉球人と明、清、さらにはシャム、スマトラ、マラッカなど東南アジア諸王国との往来史料は極めて豊富であるにもかかわらず、唯一台湾との往来を示す史料や記録が欠けているのである。特に台湾に最も近い八重山群島の史料や記録については、これまですべて欠如されているものとみなされてきた⁵⁾。

こうしたある種奇妙な現象に対し、馬淵東一は口承により歴史文献上における不足を補おうと試みてきた⁶⁾。1952 年に発表された「沖縄と台湾—伝説上の関連と無関連—」という論文において、馬淵は、村落の口承とは住民の歴史的知識と地理的知識の総和であり、また一種の集団的記憶であり、かつ各個人の知識や経験が単独で記録されたものではないと考えるべきである、と論じている。よって伝説から把握できる地理的範囲とは、おおよそは日常生活に直接かかわる生活圏といった小さいものから、記憶や想像の中の土地知識という伝説圏といった大きなものまであり、その土地の人々が抱く宇宙観そのものであると言える。

馬淵はその中で、口承の内容についてこうした解釈をしていることから、台湾の伝説と

類似した口碑伝説が見つからなかったのだろうと思われる。よってその副題には関連する語彙の他に、無関連の語彙がわざわざ付け加えられている。もし似たような型の伝説があるのであれば、民族移動について傍証することとなり、馬淵が無関連だと慨嘆することもなかっただろう。

神話伝説の借用や伝播についての分析は、古くから神話学研究の重要な課題とされてきた。特に20世紀前半の北欧各民族間における神話伝説の伝播研究では、しばしば歴史上的民族間移動を立証してきた⁷⁾。そして、レビュイ＝ストロースの構造分析に代表される神話思惟研究は、20世紀後半における神話学研究の主要な思想となったが、その根本的な仮説は、やはり同型（isomorphism）神話間に同じ源流を有するという理想的設定上にある⁸⁾。近年では民俗学の影響を受け、日本の学術界では日本各地に分散する伝説を大量に採集し研究する際、伝説の発生・形成と伝播との関係に重きがおかれるようになっていく⁹⁾。山下欣一は研究史の整理で、日本の伝説を、日本本土圏内で形成される文芸の小宇宙と、独特の琉球圏（あるいは南島圏とも呼ばれ、奄美大島、沖縄本島、宮古群島、八重山群島を含む）の2つに大きく分類している。特に後者は、大陸の朝鮮民族や漢民族と相対関係にあることが、多くの物語研究で指摘されている¹⁰⁾。

だが、琉球圏とアジア各地における伝説の比較研究において、台湾との比較は学術界では見落とされることが多かった。特に地理的に台湾と最も近い与那国島の人々が南から到來したという起源伝説は、学術界で注目や議論がなされてこなかったものの、筆者はこれこそが台湾と最も深い関係の伝説であろうと考えている。よって、筆者は本論文において与那国島の人々の起源伝説を軸として、台湾島内部の研究と照らし合せつつ、日本本土の関連する研究成果との対話も試みる。

本論文では、まず筆者がフィールドで見出した与那国島神話伝説の社会生活の文脈における伝承状況について述べ、さらに焦点を与那国島の人々の起源伝説神話の分析へと移す。こうした人類起源伝説の2つの源流への分析、すなわち北から南へという伝説と、南から北へという伝説の二者が並存している状況への考察を通じ、台湾・沖縄間の関連性という課題において、与那国島からの視点を提起する。これは東台湾海域における島嶼文化の特徴を明瞭化することにとって、有益な試みとなるだろう。

1 与那国島の概況

筆者は 1993 年 3 月 10 日にはじめて与那国島を訪れて以来、これまで（1994 年 6 月時点）4 度にわたり、あわせて 3 か月余りのフィールド調査を行っている。台湾から与那国島へ向かうには、地図の上では至近距離にみえるものの、実際には飛行機を二度乗り換えなければならず、1000 キロ近くも遠回りをしてからようやく到着するのである。与那国島の第一印象とは、遙か遠くにあり、中国語文献ではほとんど知られていない小さな島、というものだった。日本語による与那国島の旅行記や紹介文でも、ほとんどが神秘的な「絶海の孤島」と表現しており、変わった風習を多く伝えていた〔笹森 1968：217〕〔宮城 1993〕。

島は面積が約 30 平方 km であり、北緯 24 度 27 分、東経 122 度 56 分、宜蘭の蘇澳港の東方約 110 キロの海上に位置する。島の形¹¹⁾は羽を開いた蝶のようで、東西は 12 キロ、南北は約 4 キロにわたり、島の周囲は 27.5 キロに及ぶ。この島は、地理上は八重山群島に属し、琉球諸島の最も西端にあり、また日本の国土の最も西にある辺境の島でもある。

島の地形は起伏に富んでおり、砂岩と頁岩の層が堆積している。陸には山、谷、台地、湖沼があり、海岸は断崖絶壁と砂浜が並んでいる。平坦でサンゴ礁岩からなる八重山の他の小さな島々と比べると、その景観は大きく異なり興味深い。島の面積の 46% は森林に覆われており、24% は耕作地であり、残りは牧場や原野である。主な河川は田原川といい、地下水（島にはいくつかの沼地や湿地がある）を加えると、島全体の灌漑と飲料水を十分に供給できる。山地は東西に連なっており、その最高峰は宇良部岳で、標高はわずかに 231.3 メートルにすぎないのだが、突き出してそびえ立っていることから、山頂まで登ると遠くは島の最東端である東崎から最西端の西崎まで眺めることができ、四方に広がる大海原が視界に入る。

天候が快晴のときには、与那国島から台湾を望むことが出来るといわれている。だが、筆者が現地で調査した結果、実際のところは毎年夏から秋への季節の変わり目の夕刻、西崎付近の海面に蜃気楼現象により屈折した台湾島の影が浮かび上がる、という程度のものだった。こうした幻影が一年に数度だけおき、そして台湾の島影が海面に現れてから数日後には天気は必ず変わり、風雨が来襲する。漁民らはこれらを天気の指標とし、海に出るのを控える。実際のところ肉眼で台湾を望むことはできないが、古くからこうした自然現

象により与那国島の人々はおそらく台湾島の存在を意識してきたに違いない。島の影を見た人々はみな、蜃気楼現象により現れる台湾島の影は非常に壯觀であり、山脈の高くそびえるさまは絶え間なく連綿と続いており、平地の人家で煙が炊かれているのでさえほんやりとみえるほど鮮明であると話している¹²⁾。

島の住民は 600 戸余りで、人口は約 1800 人、3 つの集落に分かれて居住している。最も大きい集落は祖納（ソナイ）といい、さらに東村、西村、島仲村に分かれ、島の行政の中心を担っている。住民は農業と牧畜を兼業していて、稻やサトウキビを植え、肉牛を飼い、漁民はわずかである。もともとは祖納の港は波多港といい、今では堆積による修繕のため、港の機能は西の端に新たに造られた久部良港に移っている。久部良に元々あった村落は廃村となっており、今の漁港は 1910 年代に沖縄本島南部の漁民らが移り住んでから、再び開発された新しい港である。住民の多くは主にカジキ・カツオの漁や、中近海では引網漁に従事している。最も小さな集落は南側にある比川村で、現在の住民はわずか 20 戸余で、全戸が農業に従事している。

国の行政組織上では、与那国全島が台湾の郷に相当する一つの町をなしており、県の八重山支庁に属する。そして、東、西、島仲、久部良、比川の 5 つの村落から公民館館長と理事を選出し、それぞれの村の祭りや公的任務を担当する。島の人口は、戦後かつて台湾から引き揚げた人々や密貿易の関係で、一挙に 1 万人以上に膨れ上がった。1950 年からは密貿易は取締りがなされ、その後人口が激減し、70 年代からはさらに 3000 人にまで減り、現在に至るまで就業、就学や離島であるがゆえの物価の高さ¹³⁾、そして生活物資面における不便さから、人口流出現象は甚大であり、毎年減少の傾向にある¹⁴⁾。

宗教面についていえば、島の伝統的民間信仰は、大きくは祖先とカミの 2 つの系統に分かれる。祖先崇拜の信仰についていえば、閩南地方（福建省南部）から琉球王国に伝えられた後、八重山地域へと移入され、さらに与那国島へと伝えられた。各家の広間には祖先の位牌が備えられており、位牌と墓の祭りごとが重視されているが、これは沖縄の他の地域とおおよそ同じである。自然界のカミへの祭祀信仰については、琉球王国の神女（ノロ）組織を踏襲しており、御嶽信仰と通称されている¹⁵⁾。島全体では 12 の御嶽と 21 の拝所（うがんじょ）があり、全盛期には 12 人の女性祭司（ツカサ）が各御嶽におかれ、祭事を執り行っていた。最も大きい御嶽は「十山神社」といい、宇良部岳の山神を祀っている。一年を通じて多くの伝統的宗教行事があり、主として農業、牧畜、漁業の豊作豊漁を祈る儀式であった。だが人口が流出し、さらに伝統的儀式の内容と近代的生活がうまく結びつか

なくなり、祭司の後継者も少なくなつて、今ではわずかに70歳を超えた女性祭司3名が残るのみである。往年と比べると、その祭り行事は徐々に簡略化されており、参加者も以前ほど多くはなく、若者は学校での科学教育の影響を受けていため特に疎遠となる傾向にある。

同じ状況は母語の使用状況にもみられる。与那国島の言語は特殊な音韻と文法を有し¹⁶⁾、琉球諸島方言の中でも独特であり、八重山群島の近隣の島の人々とも互いに意思疎通ができない。だが、19世紀末から¹⁷⁾学校教育やマスメディアが標準日本語に統一されると、母語の喪失が非常に深刻となった。70歳以下の人はすでに公的な場で生粋の与那国ことばを使うことはできず、40歳以下の人はせいぜい聞きとれるだけで母語による会話はなりたたない。そして島の若者はみな母語を敬遠している。彼らの述べ方によれば、与那国方言の敬語はかなり複雑で、老人らと話をするとき、いつも敬語の間違いによりしかられるので、使いたくないのだという。こうした述べ方が母語衰退の真の要因を正確に言い当てているかはわからないが、若者が母語を積極的には学ばず、徐々に老人と母語で話す機会を失っているというのは事実である。こうした母語の喪失に加え、前述の与那国人口の流出や宗教活動の衰退が、直接的に、また間接的に社会生活の文脈における神話や伝説の果たす役割に影響を及ぼしている。

2 社会生活における神話と伝説

筆者が祖納の東村に住んだ3か月あまりの間、集会活動や儀式祭典への参加や、家庭へのインタビューなどを通じ、古くからの神話と伝説が目の前で言い伝えられている現場を目撃しようとした。だがある祭祀による由来の伝説を除き（後述）、ほとんど収穫はなかつた。

方々を尋ねた結果、島で正統な「昔話」（んかちはなし）を話せると認められている人は5、6人の老人にすぎなかつた。年齢は93歳から最も若くても87歳で、多くは女性である。筆者はそのうち東村と比川村に住む3人を訪ねた。内2人は学校教育を受けておらず、彼女らの記憶する「昔話」とは大部分が幼少時や若いとき、つまりは20世紀初めの頃、家族の年長者や友人らから聞いたものであるが、年齢が中高年を過ぎてからはその数は増えていない。村にはいわゆる語りの名手・名人が存在するものの、専門的で権威のある口述者というものではない。彼女らの記憶する名人とは男性、女性ともにおり、どちらかと

いうと男性の方が多かった。男性は公的な身分も兼ねていた人が多く、争いごとを解決し、仕事上の評価も高く、中には占いのできた者もあり、ムヌチと呼ばれた。これは多くの物事を理解しており、教養知識のある人、という意味である。こうした記憶の中にある名手・名人は、往々にして生涯島からは出ない人であった。

また、昔話を語る場は3つほどある。1つは夕食後、庭で涼んでいるとき、隣近所や親戚が会し、手仕事をしながら主として老人の話すことを聞くというものである。子供にとっては、それは老人による一種の賞罰の方法であり、老人は素行のよくない子供には「おまえのような悪い子供でも聞くに値するのか？」と叱りつけるのである。老人を中心としたこうした物語には、多くの道徳や教訓を意味する寓言や処世についての格言が含まれている。2つ目の場は、若者が夜ともに仕事をする約束をすることで、ナビとよばれており、男性は麻繩か、蒲葵の葉の笠や皿を作る。女性は麻やバナナ繊維を紡ぎ、仕事をしながら物語や笑い話をやり取りする。時には鶏が鳴き、空が明るくなるまで夢中になる。3つ目の場は、休憩時に二、三の知己の友人と屋根の下でおしゃべりをして、たがいに物語をやり取りするというものであり、誰の記憶がいいか、または見聞が広いかを競う意味合いがある。こうしたことは彼女らの親たちの世代にはよく見られたことである。全体的に言えることは、伝承の場は気軽で自由な雰囲気のことだ。これは前述したように与那国島の口碑伝承が特定の権威を有しているものではない、という特徴を裏づけている。

彼女らの知っている物語で、人類の起源をテーマとする話は少なく、あったとしてもわずか2つで、それは「てだん・どぐる」(太陽所)と「いぬがん」(犬婿)という昔話である(後述)。彼らの記憶にあるこうした話がこれからも伝え続けられるかについて、老人たちは悲観的に思っている。現代の人々は夜や時間のあるときにはテレビを見たり読み物を読んだりする。さらに若者は彼女らの話す内容には興味を示さず、方言も聞き取れない。言語面を理由に、筆者もこれまで老人たちに昔話を話すようお願いしたことはない。老人たちは標準的な日本語を使いこなせるものの、昔話を語るとなると標準的な日本語では骨が折れる上、不自然になってしまうからだ。よって今の段階では与那国島において、筆者の限られた時間や気力・体力により、その起源神話の内容については、先人らがかつて書き残した文字記録に依拠するしかない。

1975年、岩瀬博が3つの大学の教員・学生からなる合同調査チームを連れて¹⁸⁾、一行10数名で島の民間伝説についてインタビューを行ったことがある。当時彼らがインタビューした対象者は32名おり、そのうちの80歳以上の老人15名が主たる対象の人物で

あつた。調査チームは6年をかけ録音記録や翻訳の整理を行い、『与那国島の昔話』という書物を出版した。この書物では、それぞれの昔話の話者と調査者を明確に記載しており、方言による原文と日本語の標準語を対照させている¹⁹⁾。同書ではあわせて57の昔話・伝説を収録しているが、そのうち神話に属するものは7つにすぎず、多くはない。だが、その中には1つとして人々の起源を主題とする伝説は含まれていない。

岩瀬が採集した伝説のほかに、与那国島の地元の人により記述された唯一の民俗資料も重要である。『与那国島の歴史』という書物であり、地元の医師の故池間栄三により著されたもので、1959年に出版された。同書の内容は、島の伝説や歴史、祭祀行事が主である。その資料は、実際のところ島で尊敬を受けていた名士・新里和盛が30年代から記し始めたものに多くを依拠している。彼が1950年に亡くなつてからは、娘婿・池間栄三と娘の池間苗夫妻が引き続き整理して完成させた。池間苗氏は島で唯一の「民俗資料館」も所有しており、地元では最も重要な郷土史家の一人である。

特に注目すべきは、同書には島の人々の起源伝説がいくつか記されているが、これらの伝説は前述した岩瀬の著作には書かれていなかことだ。筆者はこの原因を、叙述者の出身村落との関連があるのではないかと推測している。新里は島仲村出身の長老であり、岩瀬の書で叙述しているのは多くは比川、東村、久部良村の老人である。口承における統一性のなさや、村落間の対等な関係、各村落の人々のルーツが異なる可能性などの原因により、複数の起源伝承が存在するという現象が作り出されたのだろう。いずれにせよ、岩瀬らの採集した伝説集そのものには人々の起源を主題とする伝説はなく、さらにいえば、1975年以後、地元で口碑伝説を収集した際、もうすでに起源神話を話せる老人が存在していなかつたのかもしれない。この点の詳しい原因についてはさらなる考察を要する。

島仲村は与那国島祖納集落で最も古い村落であるとされ、口碑伝説も豊富にある。この村はもともと高台にあり、波多港を見渡せたのだが、50年代末に平地へと移動した。池間の本の資料は、新里が30年代に方々の老人から採集したものであり²⁰⁾、どちらかといえば島仲村の伝承系統に属する。そして島の郷土史家による唯一の記録書物であるため、今ではこの書物は島の行政教育機関が広く採用する公式なものとなっている。1992年には与那国島の文化・教育に関する最高機関である教育委員会が郷土史家の年配者らの協力を経て認定し共編著として出版された『与那国町の文化財と民話集』は、ほとんど池間の本から引用されている。

現時点では、以上の3冊は比較的系統立っており、かつ慎重に書かれた文字記録による与

那国島の口碑伝説を記したものである。なお、以下の4つの神話と伝説のテキストは、すべて池間の著作から引用したものである。

3 人の起源と周辺諸民族との関連

1 ていだん・どうぐる

大昔、南の島から陸地を求めて来た男がいました。その男は大海原の中に、ぼつんと盛り上がった「どに」(原文注:土根と書く。今日でも田を耕した跡に土が盛り上がって、水面上に出ている所を「どにむい」と称している。)を発見しました。その「どに」には人間は住んでいませんでした。南から来た男は、この「どに」に人間が住めるかどうかを試みるために、「やどかり」を矢で放ちました。それから幾年か経って、この「どに」に来て見ると「やどかり」は見事に繁殖していました。それで、その男は、南の島から家族を引きつれて、この「どに」に住みつきました。その内に人間が多くなったので、「どに」を大きくしてくださるように、神様にお願いしました。神様は「どに」を大きくして下さいました。その後には、草木を下し給うようにお願いしました。神様は色々の草木を下さいました。それで緑の島になりました。この緑の島が与那国島であります。

この緑の島に天災がきました。四ヶ月間も大雨が降り続いたのであります。そのため土民達は大変困りました。最初に薪を得るのに困りました。寒さと飢えがせまつてきました。

土民達は寄り合って、薪のことを心配していました。そこへ一人の老人が現われて来ました。老人は生の竹が良く燃えることを、教えてくれました。それで人々は寒さと飢えから救われました。神様は、土民達のお祈りを、聞きとどけて下さったのでしょうか、さすがの大雨も終に降り止みました。この大雨のために谷や川が出来て、見ごとな島の姿になりました。この大雨が止んでから、最初に太陽の光の射した所を「ていだん・どうぐる」(原文注:太陽所と書く。今日、祖納部落の中道(ナガミテ)付近の三八番地がその場所に当ると言われ、拝所になっている。)と申しまして、今に至るまで拝所になっています。[池間 1991:66-67]

この神話は与那国で最も知られている人類起源神話である。また、八重山から沖縄にか

けてのすべての起源神話の中で、人が南の島から到来して定住した、と明確に述べている唯一の例である〔福田、山下、遠藤編 1989:75〕。神話前半部の主な内容は、(1) 人と土地の起源、方位。(2) (ヤドカリの繁殖を指標とする) 様子見の過程を経て、行ったり来たりしながら、人々はこの島へと移住し始めた。(3) この島の人口は徐々に増え出し、いろいろな草木があった。後半の(4) 災害についての話には大雨、竹、老人が含まれている。最後に(5) 島の景色は良く、太陽の光がさし、ゆえに「ていだん・どうぐる」という地名の由来となった²¹⁾、となっている。

この「ていだん・どうぐる」とよばれる場所は、伝説の中だけあるのではなく、現実にも存在する。その場所はちょうど島で最も大きい村落の祖納村の中心にあり、東村、西村の境界に位置する。島民にとってのこの場所の重要性は、次の2つの点からみてとれる。1点目としては、毎年行われる最も大事な村祭り（マチリ）は、25日間にも及ぶ儀式の季節であり、この場所は儀式において重要な場所となる。東村浦祭の始まりは、まずこの場所の祭りからはじまり一日中行われる祭儀である。女性祭司らはそれぞれこの場所で必ず宇良部岳の山の神、もしくは南方に向かって遙かに拝む²²⁾。神話の内容は宇良部岳の山の神とはほとんど無関係のようではあるが、当時はそびえたつ小さな丘であつただろうと理解することができる。2点目としては、島の行政機関はこの場所を「民俗文化財」として指定しており、重要な伝承地として認定していることだ。よって、少なくとも今日までかなりの島民がこの起源伝説と共にこれを認識しており、この伝説は今日の島の歴史教育における共通した記憶の基礎となっている。

この神話は前述の通り沖縄地方にわずか一例しかなく、今日の文献においても台湾東北海域上の与那国島においてのみ登場する。今のところ、学術界ではこの神話について分析を加えてはいない。事実、もし従来の口碑伝説研究のアプローチに沿って、近隣の地域で類型の話を求めるのであれば、台湾は疑いなく最初に考察されるべき地域である。台湾東部の民族について少しでも理解のある者ならば承知しているとおり、台湾東部の諸民族の人類起源伝説には、人が南から海を渡ってやってきたという口承があり、長らく伝説の重要なテーマとされてきた。早い時期の調査であればあるほど、こうした伝説が多く残されている。

古くは19世紀末の伊能嘉矩による調査、および20年代の佐山融吉、大西吉壽、波越重之らによる調査、そして30年代の移川、馬淵、安倍明義、鹿野忠雄等といった学術関係者による調査の全てにおいて、台湾東部沿岸部の諸民族は南方、もしくは東南の外海から

人々が渡来してきたという起源伝説があり、彼らの伝説にある、それ以前の居住地の名称や方位はほぼ似通っている、ということは推察されていた。こうした伝説が研究者らから広く注目されるようになり、研究者は関連する歌、言語、口碑伝説を採集し続け、その数は数十にも達している。日本統治期においては、民族学者に記述されることの最も多かつた伝説研究と言えるだろう。戦後になって森口恒一、清水純等が現地語で採集した伝説にある元居住地の名称や方位も、やはり戦前の研究者が調査したものと一致していた。

台湾北海岸と東海岸でよく伝えられ、方位のみ知られているが、場所の詳細は語られていないこの伝説の位置は、似たような呼び名が多くある。Sunasai、Sanasai、Sansai、Sunasayan、Sanayasai、Sanasanといったもので、他に Maririyen といった例もある²³⁾。その主たる分布については文末の図を参照されたい。

近年、詹素娟〔詹 1998〕が「Sanasai 伝説圏」を提唱している。詹の整理によれば、いわゆる「Sanasai 伝説圏」とは地理空間に台湾北海岸、台湾東北端、宜蘭平原、蘇花海岸、そして東海岸を含んでおり、ケタガラン族（またはバサイ人、ルイラン人）、クヴァラン族、トルビアワン人、カウカウット（猴猴、Qauqaut）人、アミ族（海岸アミ、卑南アミ）において広くみられる。詹はその基本の原型を次のように整理できるとしている²⁴⁾。

昔、ある一群の人々が、故郷での生活が難しくなり、南にある島—この原郷がサナサイ（Sanasai）と呼ばれることがある—を離れ、北へと進んだ。移動の途上、まずサンサイという島にしばらく逗留し、そして台湾東海岸のあるところに上陸した。その後、ある者は定住し、またある者は引き続き海岸に沿って北へと移動し、落ち着いて住める所をみつけた。

詹の研究では、この民族が南から北へと絶えず移動しているという過程を強調している。サンサイ地方の方位は、馬淵〔馬淵 1931〕の収集した花蓮新社クヴァラン人の陳潘氏が、「Sunasai は南方にある島であるが、何処にあるのかよく分らぬ。その南に二つの島がある。これらの島々も同じく Sunasai とよばれる」と述べるように、どの族も具体的な場所を示すことはできない。ただ方位だけが南もしくは南東を指しているだけで、また儀式についても東の海に向かって祖先の来た土地を遙かに拝む、という点のみが一致しているだけだ²⁵⁾。

よって、20世紀前半の研究者らはこの口碑伝説により台湾東部民族間の北への移動や、

その中の類縁関係を推しはかろうとしてきた。例えば、安倍明義はこれと同源の伝説や他の言語資料により、ケタガラン族、クヴァラン族、アミ族の三者間の関係とは比較的近いものだと論証しようとした。また、移川子之蔵は当時の北米における民族史学の学風の影響を受け、よりいっそ先住民族の各種口碑伝説の採集に努めた。彼はクヴァランの歌と伝説からスナサイという島についての様子を次のようにまとめている²⁶⁾。

- (一) スナサイの位置は南方海上に在り、其の距離は台東方面より約十日間を要した。
- (二) スナサイ附近の地名としてはバサイ以外は明瞭に記憶されてゐない。
- (三) スナサイの地は四方山で塞がり、中央部が平坦にして其所に沼が在る。併し水田はほんの僅許りでルガイ（栗）とパナイ（陸稻）の耕作が主で、水稻を作らうにも土地が無かつた。パタ（里芋）とタゲイ（薩摩芋）は豊富であつたしプラス（檳榔樹）も亦た澤山在つて口が黒くなる程キッサン（檳榔實）を嚼んでゐた。檳榔の實に石灰を加へたものをピンヌングと稱してゐる、今はキッサンも買求めて漸く嚼む位のものである。
- (四) 家畜としては鶏や豚もあつた様に聞えてゐるが、山羊や水牛は飼養せしや否やは不明である。
- (五) 男子は褲（バルナン）、女子は腰巻（ハラピヤン）を使用せしも皆麻製蕃布であつて、褲は二枚折にして股を貫し前に結ばずして臀部に結んだ、珠類も到來當時持つて來たし衣類にも縫付けられてあつた、今日彼等の間に知られてゐる珠は、ラツソン（茶褐色の小粒珠）、ニベエグバ（ラツソンより幾分大きい粒珠）、マガバン（金珠）、スマカイ（管玉状にして稜角を有する瑪瑙珠）、カリヤバン（長い紅瑪瑙切子珠）、ブリク・ナウナウ（瑪瑙丸珠）、リキリク（碧色ガラス珠）、イトス（碧色白珠）等あり、又脚飾用アミル又はバキヤットと呼べる真鑑小鈴の如きものも嘗て使用せる事は明かである。
- (六) スナサイからと云はれる物に「鍬形に曲つた金棒状のもの」が在つたとも傳へられてゐるが、果して之が、鍬か鏃かそして祖先が祖國から遙々持つて來たものか、それとも蘭陽の海岸で拾つたものか、其邊の事情は明瞭ではなく信は置けないが三、四代前（曾祖父）頃迄は石鍬（バト、タタク）を使用せし事は事實らしく、今日は移轉や火災等相繼ぎ為めに失つて了つたけれども、以前は屋敷の隅等に在つて小供時代に持巡り引張り廻つた事を記憶してゐる、随つて本島へ渡來せる時代には石

器使用の域を脱してゐなかつたものと推定される。

(七) 故國と往來せる記憶がある、スナサイに湖沼の在る事は前にも述べたが、其の沼の邊にプラワン（金）の寶物を澤山入物に封じて埋めて來た、後に行つて探して見たが埋めた場所が判らなかつたと傳へられてゐる。

移川による以上の論述から分かることとは、スナサイという故郷の水田耕地はとても狭く、水稻は尊いものだが耕作地が足りず、陸稻やアワを主としていたということだ。またトンボ玉を好み、カラムシ（苧麻）を衣服の原料とし、衣服を臀にまとうなどといった特徴は、西太平洋以北における文化的特色ではない。さらに筆者が興味を持ったのは、いわゆる「鉄形に曲つた金棒状のもの」とは何か、という点である。筆者はかつて史料記録の試論〔黄 1997〕において、15世紀に朝鮮人が与那国島へ漂流してきた際、その地では大きな鉄器は使わず「鉄を精鍊し、すきは作らず」、小型鉄器を使い「小さなくわで畑を耕し粟を植える」と記録されていることに言及したことがある。そしてこのような鉄器とは、民族植物学者である佐々木高明の研究によれば、東南アジアで典型的によくみられる掘棒農耕文化の產物であり、粟やイモ類を栽培するのに適している。さらに、この漂流記録の記述にあるように、与那国にもいくつかの特徴があつたのである。例えば、アワも植えるが、水稻を貴び「粟ありと雖も種うるを喜ばず」。他にトンボ玉を好み、「其の俗、耳を穿ち、貫くに青小珠を以てし、垂ること二、三寸許りなり。又、珠を貫ぬき項を繞ること三、四匝垂ること一尺許りなり。」衣服については「唯だ苧を織りて布を為る…中裙は白布三幅を用い、統べて臀に繋ぐ。婦人の服も亦た同じ。但だ内に裳を着す。」といった特徴である。よって、移川の叙述からみれば、スナサイという故郷の文化的情景と、15世紀の与那国島の物質文化には偶然にも一致するところがあり、与那国島の祖先の起源地も、極めて同じ文化型式の色彩が濃かったのだろうと推察できるのである。

また「てだん・どぐる」神話の前半部である土地と人の起源テーマに最も近い台湾東部の伝説は、ずっと時代が下った1985年に清水純がクヴァラン語から採集した伝説である²⁷⁾。これは新社村クヴァラン人の朱吐文（1909年生）が述べる祖先の起源伝説である。筆者は次のようなサブテーマに大まかに分類してみたい。

(1) 我々はフィリピンのところに住んでいたそうだ。

(2) そこには人が大勢いたものだから、…いつの間にか、四名の男が漁に出かけた。

(3) いつの間にかずーっと風に吹かれて、陸に上がり、ここにやってきたそうだが、昔は台湾なんてなかったんだよ。…ここへやってきたのは、四名の男だったそうだ。…「ああ、ここはいいねえ、ここに住みましょう」と四名の男は言ったそうだ。

(4) いつの間にか、三日たってから、いや、四日目に帰ってきたそうだ。…「私たちはあそこの陸地へ行ったが、あそこはよい陸地だよ」と男たちは自分の奥さんたちに言ったそうだ。「どれくらい、いいの?」「とてもいいよ、あそこへ移り住みましょう。住むところも水田を開くところも、何でもあるから、向こうの我々のところに住みましょう」と男たちが妻たちに言った。

(5) ここに着いて、見たところが、以前はこんなになっていたのに（原文注：沈んでいたのに）、…どういうわけか、この台湾は自然に現れたそうだ。

(6) あの人たちは漁をしていて、ここへ来たけれども、わからなかつた。見ると、牡蠣とかパイスなどの貝類の張り付いているところがあった。「はあ、ここの敷地はとってもいい。この敷地はねえ」と彼が女に言った。その奥さんに話したよ。「とっても敷地いいねえ」と言うと、「うん、いいよ。ああそれならもう私たちの故郷へ帰らないでいい。ここに住みましょう」と女は言ったそうだ。そしてここに住むようになった。

(7) 四人がここへやってきたことを、いつの間にか他人が知るようになった。…いつの間にかに、もう一回男がフィリピンへまた魚を捕りに行つたそうだ。「向こうのあの島はいいよ。私たちはあちらの島にいます。…向こうへ行きましょう、私たちのところへ」とあの人たち、あの四名の人が言ったので、「向こうへ行きましょうか」といって、今では全員がここへ來た。

(8) そして、私たちクヴァランは台湾の人になった。…「…こちらの上等の土地は何という土地かなあ」と言ったそうだ。クヴァランはこれが台湾であるとはわからない。「何だろうねえ、こここの陸地が何なのか、私たちはこここの名前がわからない。私たちのところの名前はスナサイだが、この土地の名前が何なのか分からない」とフィリピンの人が言って、みんなでやつてきた。

(9) いつの間にかこのクヴァランは大勢になったようだよ…。私たちクヴァランはこのような状態であつて、この話はこの通りです。私が夫から聞いた話はこれだけよ。

この近年採集された話から、クヴァラン人が新たな土地へとやって来る過程とは、「てだん・どぐる」の伝説と類似し、同工異曲で同じ旋律を歌っているかの如くであると分かる。原文では、初めフィリピンと呼んでいるが、後になると徐々に Snasay が多く用いられるか、あるいはフィリピンの Sunasai と強調しており、筆者にはこのフィリピンという語の意味とは、南方という方位を明示するにすぎないものと考えられる。採録したのが 80 年代であり、口述者にははっきりとしたフィリピンという地理名や方位の概念があると思われる。だがそれは第二次世界大戦時に多くの台湾先住民青年が南洋へ戦争に赴いて得た地理的知識なのかもしれない。

いずれにせよ、人が南方からこの地へ到来し、数度の往来を経て定住し、そして海辺の貝類の繁殖をもとに人が住めるかどうかを決めて、人口が少しずつ増え、その土地などを賞賛したというサブテーマは、与那国島の「てだん・どぐる」伝説とはからずも一致し、構造的には共通点が非常に多い。よって、与那国島「てだん・どぐる」伝説の遡源を探求するのならば、台湾のスナサイ伝説圏の諸民族と接触し影響を受けた可能性もあるが、その儀式における重要性からみれば、むしろ与那国島の人の祖先もまた南の故郷を源流とする民族のひとつであると推測するほうがよかろう。少なくとも筆者には、与那国島「てだん・どぐる」起源神話を「サナサイ伝説圏」の一つと見なしても大過ないと思われ、清水の採集したスナサイ伝説はもう一つの明証たりうると考えている。一方、移川や詹の研究で得られた結論のように、こうした諸民族が南から北へ移って行ったということを主張するのならば、与那国島人の起源問題もまた台湾の「サナサイ伝説圏」諸民族の起源問題と同じ土俵で思考すべきであろう。

最後に、特に説明を加えなければならないことがある。詹の整理したサナサイ伝説の原型は、関連する伝説の前半部分にすぎないということである。この原型に統いて後半部がそれぞれ展開していったのであり、各民族あるいは集落の間に現れた非常に大きな差異は、各地域の民族がその土地の文化、自然風土、環境に適応していったという特色を示している。与那国島の「てだん・どぐる」伝説も同様である。言い換えると、伝説そのものの物語構造からみれば、サナサイの伝説と「てだん・どぐる」伝説は同じ語り始めを有する構造の、一群の物語類型にまとめることができるのである。

2 大津波、大災害から生き残った話

どなだ・あぶ

大昔、島の人々は山野に生えている木の実、蔓の根をさがして喰べていました。又、海岸に出て魚介類を漁り廻っていました。税金はなかったし、搾と言うものもなかつたので、土民達はほんとうに自由の民の暮らしをしていました。

ある日、青く澄みきった大空が、にわかに橙色に変わってきました。土民達は、これはただごとではない、何かの前兆であろうと愕然としました。そのうちに空の色はだんだんと赤い色に変り、遂に紅の炎となりました。空の色が変わるにつれて暑気が増してきました。

土民達は慄哭して天に向って祈りの声をあげました。しかし、その効験は少しも現われないで、とうとう運命の時がきて、空から火の雨が降ってきました。土民達は泣き叫びながら右往左往しましたが、この火の海から抜け出ることが出来ませんでした。島は焦土と化し、生きとし生けるもの皆焼き殺されてしまいました。ところが神のみ心にかなつた一家族が生き残っていました。その家族は神のみ声に従って、「どなだ・あぶ」（原文注：旧島仲部落の東方ブシキと言う所の畠中にある。「あぶ」とは縦洞のことである。）にかくれていました。それで無事に助かりました。その子孫からは耕すことを知るようになりました、又、働いて余分の物を貯えることを知るようになりました。その為に、島は栄えるようになりました。〔池間 1991：67-68〕

ながま・すに

大昔、この島に大津波がありました。そのため人畜はことごとく死んでしまいました。ところが不思議にも一人の母親と一人の男の子が助かっていました。その母親は、とどろきひびいて押しよせる波の間に、自分の子供と実兄の子供を抱えて漂いながら、神様の救いをもとめていました。そのうちに「ながま・すに」（原文注：仲間曾根と書く。「なかもど」とも言う。旧島仲部落の東南方にあって、島の中央にある丘陵である。石灰岩と砂岩よりなり、二枚貝の化石がある。）と言う所に漂着しました。此処は島の真中で、東西から押し寄せる波のかち合う所でありました。ところが、まもなくこの丘も危くなつて、ついに子供を一人棄てるきわになってきました。さて、二人の子供の内、どちらを棄てたらよいか、これが大問題でありました。つまり一人は自分の実の子でありますし、他の一人は実兄の子供ではありますが、しかし自分の実家の血をうけた最後の一人であったからであります。ところが、ついに母親は血筋を守る道を選んで、自分の実子の手を放してしまいました。それは実に人間の悲しみ

のきわみがありました。ひにくにも、まもなく、さすがの大波も静かになりましたので、母親と甥は助かりました。島はその子孫から再び栄えてきました。〔池間 1991：69〕

以上の2つの伝説とは、大災害を経て、島民が再び繁栄していったという話である。大津波と火の雨といったテーマは、八重山地域で比較的よく聞かれる〔稻田 1983〕。特に前者の火の雨による大災害というテーマと、八重山波照間島の起源伝説は極めて似ている。波照間島は与那国島の東南方面に位置し、日本の国土の最南端の有人島である。波照間の物語は与那国島のこの神話より複雑で規模が大きい。その前半部はほとんど重複しており、島民の元々の楽天的で平和な生活は、油の雨が降ったことで大地の生物が死滅してしまう、とある。だが、異なるのは後半部の展開で、油の雨と焦土、大災害を洞窟で避難していた兄妹が、のちに夫婦となり、2度の失敗のあと3回目にして子孫を残したのが今日の島の家族の始祖で、いくどかにわたる島内の移動を経て、最後には定住する²⁸⁾。波照間島のこういった「兄妹婚型」伝説は台湾や東南アジア、華南地域でよく見られる。とくに台湾島のアミ族、クヴァラン、パイワン族ではとくに顕著で、兄妹婚や人を造るのに失敗し成功するという類似の伝説が存在する²⁹⁾。台湾島内部のものと比べると、与那国のこの神話の構造は単純で、儉約を教訓とする意味合いを帯びており、波照間島神話の弱まった型であるとみなせるかもしれない。

2つ目の「ながま・すに」神話は親族組織と継承形態について語る話である。神話に登場する女性は嫁いでしまっているものの、重大な危機が訪れたとき、自身の夫の家の継承を犠牲にしてでも、自身の実家を継ぐ重要性を強調しており、父系継承と母系継承のはざまにおける女性の衝突と矛盾を示している。これまでの社会文化研究で指摘されているとおり、与那国の親族関係には双系の名残がみられ、父系を優先した祖先崇拜の観念は18世紀から八重山地域に入ったものである〔渡邊他編 1978：28-39〕。この点から言えば、この神話は双系あるいは母系優先の社会組織形態に呼応しているようである。一方、このような社会組織形態は八重山以北の東北アジアの諸民族にはほとんどみられない。反対に台湾東部海岸地域のクヴァラン族やアミ族などの社会は典型的な双系、または母系優先である。

以上の2つの神話が述べる地名は、今でも確かに存在している。「あぶ」は島仲村遺跡の東の田畠にあり、「ながま・すに」という地名も旧島仲村遺跡の南東の丘陵にある。

3 沖縄群島内の漂流伝説

いぬがん

大昔、久米島から特別仕立の船が琉球本島へ向って出帆しました。その船は琉球中山王に奉る貢物を積んでいました。ところが荒天に遭って、とうとう漂流してしまいました。流れ流れて、ようやく辿り着いた所は与那国島がありました。上陸して見ると住み心地のよさそうな無人島がありました。この一行に一人の女と一匹の犬が加わっておりました。ところが或る夜から、一行の中の男が一人一人行方不明になって、ついに女と犬とだけ生き残りました。男達は犬にかみ殺されたのであります。それから女と犬は「いぬがん」と言う所で、一緒に暮しておりました。

話かわって、お隣の小浜島で、或る日、一人の漁夫が小舟に乗って、潮干狩りへ行きましたが、帰る途中に、にわかの荒天にあって漂流しました。彼もまた流れ流れて、たどり着いた所は与那国島がありました。上陸して見ると人家はありません。此処彼処さがし廻って、ようやく「いぬがん」にきました。ここで、小浜男は久米島女に会いました。女は大変驚いて、此処には猛犬がいて、危険な所でありますから、今、犬の不在を幸いに、早くこの島から逃げて下さい、とうったえました。

しかし小浜男は久米島美人の手前もあったのでしょうか、島を逃げ出そうとしないで、かえって勇気をふるいおこして、猛犬退治を決心しました。それで、久米島女には島を去るように見せかけておいて路ばたの大樹にのぼっていました。腰には蛮刀をさしこみ、手には漁獲用の鉈をもっていました。案の定、まもなく猛犬が現われて、木上の男を見るや、たけりたって大木にとびかかりました。男は機を見て、犬に鉈を打ちこみましたが、犬はますます猛り立って、なかなか弱りませんでした。それで男は樹からとびおりて、直ちに蛮刀を犬にあびせかけました。さすがの猛犬もついにたおれてしまいました。

小浜男は、久米島女に会って、いさましく犬退治の始末を話しました。久米島女は、犬の死骸はいざこに埋めてありますか。と聞いただけで、後はだまってしまいました。小浜男はどうしたのか、犬の死骸の埋めてある場所を話しませんでした。そのうちに、この二人は夫婦になって、五男二女を産むまで幸福に暮しておりました。しかし好事魔多しで、ついにこの小浜男に不幸な時がきました。それは、小浜男がふる里を思う心をたち切ることが出来なかったために、小浜島へ帰ったことから始まります。

今浦島のように、故郷の小浜島へ帰ってきた小浜男は、島の人々をびっくりさせました。長い月日を波の音と共に暮してきた老婆は涙を流して夫を迎めました。漂流の話、与那国島の話、その後の小浜島の出来事等々語り交わしている内に、月日は流れてしまいました。或る日、小浜男は老婆に与那国島にのこしてきた家族の事のしたい話をしました。そうして再度の与那国島行きの話をしましたら、老婆はいかってなかなか聞き入れませんでした。それで、男はある夜ひそかに小浜島をにげ出しました。恐った老婆は、小浜島と与那国島とは縁を切った、と叫んで、機（はた）にかけてあつた織物を断ち切ってしまいました。その因縁によって、今にいたるまで、与那国島の旅行者は海上で小浜節（小浜島の民謡）を唄うのを嫌っています。

小浜男は再び与那国島へ帰ってきました。或る夜、男は上機嫌で家族と話し合っていました。すでに子供七人も生まれていることだし、話してもさしつかえないだろうとの気持ちから、犬の死骸の埋めてある場所（原文注：犬の死骸を埋めた場所を「いた」と称している。「いぬがん」の東南方に大きな扁平の黒石がある。その石が「いた」である。その下に犬の死骸が埋められてあると伝えられている。）をしゃべっていました。

その夜、女は家出しました。あくる朝、男が不審に思って犬を埋めてある場所へ行って見ると、女は犬の骨を抱いて死んでいました。この話から、与那国島の俚言に、子供七人生んでも、まだまだ妻に気を許してはいけません、と言うのがあります。この五男二女から与那国島は栄えてきました。

（原文注：犬神と書く。野底原と言う所にある。大正時代までは大密林地帯であったが、今日は開墾されて畑になっている。大きな洞穴があつて、底は清水が流れている。その流れを「いぬがん・から」と称している。女と犬との同棲物語は、宮古島の島建の伝説にもある。英人ジョン・バチエラの著書によると、アイヌの伝説にもある。又、元台北帝大の金闇丈夫教授の著「胡人の匂ひ」にも、海南島から南支那一帯に同様の話のあることを伝えている。）〔池間 1959：70-72〕

以上の伝説にはいくつかの主題が含まれている。(1) 人の起源についての説明についてであるが、北方の沖縄の久米島と小浜島の人がこの無人島に流れ着いたと伝えられることである。漂流元は前述した場所が不明の南方の島とは異なり、更に距離が近くて同じ琉球文化圏の島である。(2) 女性と犬が共に暮らしているというテーマである。(3) 漁夫の登

場、犬殺し、女性との結婚、7人の子供を出産している。(4)漁夫の告白。(5)女性が家出をして自殺する。(6)夫婦関係についての戒めや教訓についてである。類似の伝説は岩瀬の著作にもあるものの、人の起源と漂流の部分は書かれていない。「いぬがん」の地名は祖納村近くの天蛇鼻地域に実在し、崖淵の下の窪んだところで、波多海港を遠く眺めることができて景色は美しく、今日では「民俗文化財」と指定されている。

この伝説は日本各地に広く分布しており、一般に「犬婿伝説」と呼ばれている。福田晃 [福田 1984]はこの種の伝説について詳細な分析を加えている。福田の統計整理によれば、日本各地には合わせて 29 の例（沖縄を含む）があり、その分布は奄美諸島の 6 例と四国の 6 例が最も多く、続いて西日本の兵庫に 3 例、京都に 2 例、その他に長崎、広島、福井、新潟、山梨、福島、青森でそれぞれ 1 例ずつ採集されている。地理的な特徴についていえば西日本が最も多く、特に奄美諸島、四国方面に固まって分布している。

各地の変異類型には、(3) 漁夫の登場の箇所が、海側ではない西日本の山地に到来してからは、漁師となっているということである。その上、与那国島の伝説にあるように、女性が真相を知った後、(5) 家出し自殺するという例は逆に少ない。ほとんどは犬婿が殺されてから、女性が漁師に仇を討つというものであり、夫婦が共に過ごして「子供を 7 人生んでも安心できない」という教訓談を導きだしている。最後の教訓談とは、福田の分析によれば、江戸時代の流行戯曲である淨瑠璃や浮世草子の脚本内容の一節である。合わせて 30 近い「犬婿伝説」のうち、半数にはこの教訓談がないことから、福田は教訓談を伝説の母型とするのではなく、ストーリーが進展し伝播していく中で教訓談と結合していったものと考えている。

さらに、福田は与那国島の伝説例と華南、台湾のセデック族、東南アジア（海南島の黎族など）の「犬祖伝説」との比較を進めて、与那国島の例は華南地域の犬祖伝説が黒潮を経由して北上した伝説であるという結論を導き出している。だが沖縄の「犬婿伝説」も華南の民族などが主張する犬祖の末裔ではなく、福田は沖縄の「犬婿伝説」は華南とその近辺（場所は示されていないものの台湾を指すはずである）の「犬祖伝説」と日本本土の中の中間形態であるとしている。

筆者は福田の分析について、日本本土についての分析の事例は同意する。だが与那国島の「犬婿伝説」を中間形態とする論点については、幾つかの見解と異なる見方を補足したい。まず福田はこの伝説の1つ目の主題である人類起源を説明する点について見過ごしている。最も古い起源は久米島（男、女、犬）であり、その後別の男が小浜島から与那国島

地に来ている。久米島は琉球王国時代に宮古、八重山など南部の島々と交易をおこなった場所であり、琉球王国の交易拠点ともいえる。また小浜島は八重山群島のまた別の島である。福田がこの伝説を分析した際、沖縄の他の地域では北の奄美諸島を除き、沖縄本島の読谷村と宮古島にそれぞれ一例ずつあるのみとしているが、実のところ福田自身が参与し編集・採集した小浜島の伝説集〔福田他等編 1984〕でも、ほとんど同じ伝説を採集している。主人公は小浜島の漁夫、姓は竹富家の人で、その物語の筋は小浜島の視点から叙述しており、人が久米島から与那国島へと漂流したという点は抜け落ち、最後の教訓の箇所も小浜島と与那国島の関係が悪いというだけで、「子供を7人生んでも安心できない」というものではない。

小浜島の伝説には、もう一つ酷似した例があり、合わせて2例あると言える。筆者は与那国島と小浜、久米島そしてその北の沖縄本島との歴史的関係から考察を加えることでこの伝説の伝播の方向が説明できると考えている。いずれにせよ、さらに辺境の与那国島では、かえって北方、特に四国、兵庫の事例と極めてよく一致していることがうかがえるのである。例えば（1）女性と犬の交わり、（2）漁師（獵師）が犬を殺す、（3）漁師と女性の結婚、（4）漁師の告白、（5）女性の仇討、（6）教訓、などといったものがみな同じなのである。よって、伝承の起源は北方に違いないとみられる。与那国島とその他の事例での最も大きな違いとは、最初の人類起源の方位についての叙述であり、これは他の諸伝説では見られないものの、与那国にとっては非常に重要なものであり、こうした叙述は北方起源の優勢、すなわち琉球王国の発祥の地としての地位を強めるものであると考えられる。

また、筆者は周辺諸民族の伝説との比較研究も試みてきた。台湾の「犬祖伝説」は、筆者が調べたところでは東北海岸部のタロコ族（タイヤル族セデック群の一派）やクヴァラン族においてのみ見られるものである。1920年の佐山らによる調査や戦後の喬健他編の原住民伝説集からは重要な「犬祖伝説」を見出すことができない³⁰⁾。福田の文章で使用された資料は文中に注記はされていないが、小川、浅井が収集した資料である可能性があり、その中でも「セデック群タロコ蕃」の2つの伝説が犬祖と関連がある。そのうちの1つのサブテーマは、（1）女性だけで、男性はいない、（2）女性と犬が交わり、子供を出生、（3）子供が大きくなってから母と結婚する、（4）子孫が繁栄し、「タロコ蕃」となったこと、である。もう1つの伝説のサブテーマの構図もおおよそ似通っている。その他、クヴァラン族の「犬祖伝説」は犬婿が全てに登場しているのではない。清水〔清水 1998〕の採集した3つの犬祖起源伝説において、テキスト04の示す物語構造は、兄妹間で生まれた子

孫がタロコ族となり、その後、兄は雌犬と夫婦になり、その子孫がクヴァラン族になった、というものである。テキスト 07 では、女性 1 人と雄犬が夫婦となって息子を産み、息子がその母と夫婦となって女児を生み、この女児の子孫がタロコ族となって、息子の子孫はクヴァラン族になったというものである。また別の伝説であるテキスト 14 とテキスト 07 はほぼ同じである。この 3 つの伝説を見ると、すべてタロコ族伝説の構造と極めて近く、日本の「犬婿伝説」とは相当開きがある。最後に、筆者は戦後の学術界においてまだ指摘されていない別の「犬祖伝説」を見出した。これは前述の 2 つの民族のものではなく、秀姑巒アミ族猛仔蘭社の言い伝えであり、その内容とは次の通りである³¹⁾。

昔、東方の或る島に皇帝あり、頭に腫物が出来た。これを癒した者に娘を與ふること、なり、犬が腫物を舐めたところ美事に癒つた。そこで犬に娘を與へる。皇帝は部下を Takilis にやつて土地を見させ皆で竹筏に乗り、そこに移る。犬と娘とは夫婦になり、十日間に男女四人の子が生る。この子供等が Takilis から出發して南方の地を探検してゐる間に、更に澤山の子供が生れ、彼等は各地に思ひの土地を求めて移住した。これがパングツアハ族の諸社となるのである。また、各自の考へで夫々の paisin（禁忌、祭祀）を作り、かくして幾多の諸氏族に分れた。

おわりに

以上、筆者は与那国島の神話伝説の現状と資料について初步的な考察を行った。与那国島社会は手工業、無文字といったような古い時代とまさに別れを告げる直前にあり、こうした時代の転換は、民間口頭伝承の生命力が衰えるという現象に凝縮されている、ということをフィールド調査で強く感じた。人々が伝説を伝えていくことに関心をもたなくなつたとき、これに取って代わるのは、表記体系により統一された標準版なのである。そして文字の表記体系において「叙述者」の存在は消えてしまい、結局、その伝説は硬直化し、断片的に「残存」することになるのである。

では、いかにしてこの「残存」を利用して馬淵東一のいう歴史記録の不足を補い、歴史事実と照らし合わせることができるのか。その目標に達するには、思考の新しい地平を切り拓き、いくつかの手法を整合することが必要である。その 1 つとして、いわゆる文字により馴らされた口頭伝承については、史料のように文献研究により研究を進める必要があ

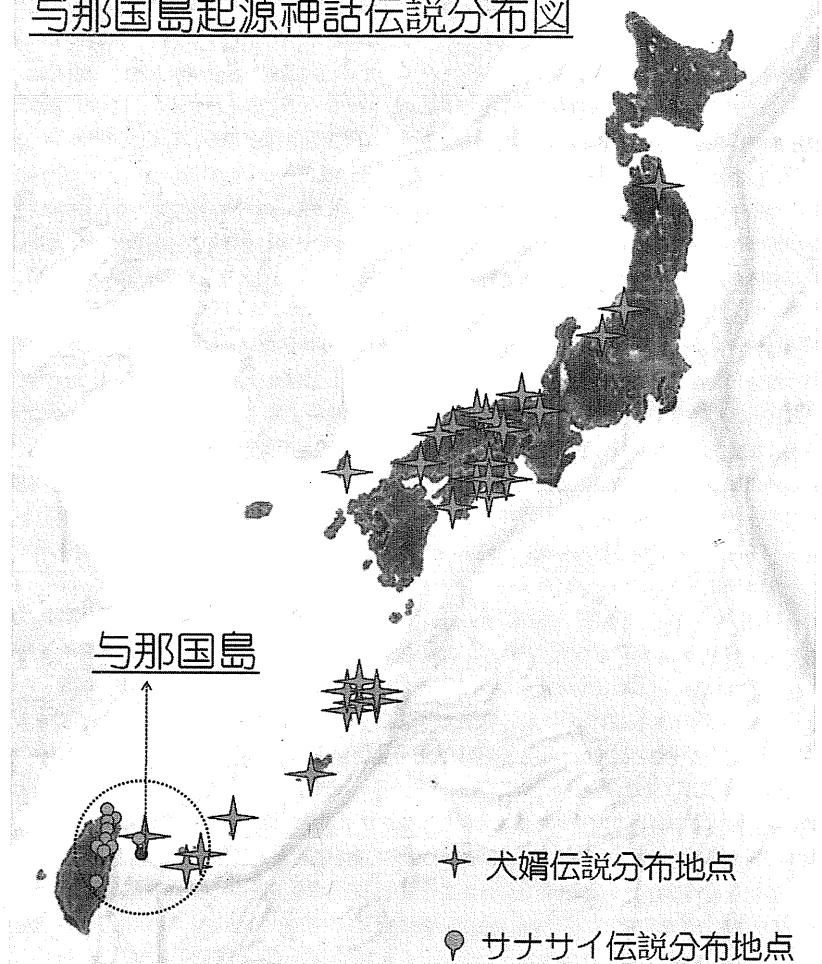
のことだ。また、言語や地域、国境などの限界を乗り越えることで、比較研究のできる材料の採集が可能になる。他にも、文献上にあるものだけでなく、与那国島の行政機関が伝説の場所を「民俗文化財」に指定したこと、現実的な時空において「残存」を存続させるための一種の手段である。当然のことながら、現代に生きる人々が受け継ぐことのできる場所と伝承のみが存続できるのだが、今後、この島の社会文化と自然立地条件からして、いかにこの伝承を受け継いでいくのかについてはさらなる考察を要するだろう³²⁾。

与那国島の人類起源をテーマとする神話伝説に限っていえば、与那国島の人の生活圏と神話圏を地理的空間において表すことができるかもしれないし、八重山の他の島民と比較すると、未知の南方の島をいっそう深く意識している。だが30平方キロメートルにも満たないこの小さな島に、同時にいくつかの異なる起源伝説が存在することについては、どのように考えればよいのだろうか。もしかするとこの小島に住む人々は、島に到来した時期が異なっていたのか、それとも居住には不向きと考えて再び黒潮に乗って島から離れて、そして入れ替わりにまた別の一群の人々が島に入ってきたのかもしれない。こうした特徴は、環台湾東部の島嶼群における文化的特色と言えるであろう。すなわち異なる源流の伝説がこの地で交錯し、絶妙な不調和や不一致の現象を形成しているのである。さらには異なる歴史時期の文化的事物も同時に1つの時空層に存在しており、これと中国大陆式の段階的進化論による歴史観を比べるきわめて大きな違いがあるため、島嶼文化を観察する際には留意すべきである。

台湾と関連するかもしれない課題についていえば、馬淵は与那国島の南方起源神話の採集分析はしていないものの、台湾東海岸諸民族の伝説にある東の海上の島、そして彼らの異民族との往来経験についての伝承にも注目すべきだ、と指摘している。馬淵が言及しているアミ族の他にも、航海技術を有する東北海岸のクヴァランとケタガラン族の口碑の採集と比較については、筆者が本論文にて試みた。その考察の結果から言えることは、与那国島の「てだん・どぐる」神話伝説は、スナサイ伝説系統のひとつではないか、ということである。大災害からの生き残り伝説に含まれる「兄妹婚型」伝説や母系優先という2点も、台湾東海岸諸民族との類縁性を有し、これに関しては更なる比較研究による裏づけが待たれる。最後に、「犬婿伝説」の起源についての筆者の結論は、少なくとも台湾にはない、ということだ。また、与那国島のこの伝説が華南の「犬祖伝説」から影響を受けているか否かについては答えを保留したい。文末の図で示すように、筆者が与那国島で採集した人類起源の伝説神話には、南北2つの源流が並存しており相反しないという特性がみられる。

2ヶ所とも今日の地方行政機関より、「民俗文化財」として指定されており、少なからずの人がなぜ南源説があり、また北源説も存在するのか、というように疑問を抱いている。筆者のフィールドでのインタビューの経験から感じたことは、島民自身もかなりの程度、異なる系統源流に由来するという事実を受け入れていることであり、そのことは環東台湾海の島においてはまったく自然なことにすぎないということである。

与那国島起源神話伝説分布図



[謝辞] 稿のもととなった中国語論文は、黄智慧、2000、「南北源流交匯處：沖繩與那國島人群起源神話伝説的比較研究」『民族学研究所集刊』（李亦園先生ご榮退記念特集号）89：207-235、台北：中央研究院民族学研究所、として掲載されたものである。今回日本語に翻訳し本誌に投稿した際、査読者より丁寧なご指摘をいただいたことに感謝申し上げる。

注

- 1) 鳥居龍蔵は19世紀末に台湾での調査を終えた後、1904年に沖縄群島へと赴き調査を進めた。鳥居は後の回想において、石垣島川平貝塚遺跡から出土した陶器と、アミ族、ヤミ族の陶器が極めて酷似していることを指摘している。[鳥居 1976 (12) : 229] を参照。伊能は伝説に分析を加え [伊能 1908]、移川も言語学の観点からこのテーマについて論及している。[移川 1931 : 36] を参照。金関や国分は1954年に波照間島で実際に発掘作業を行っている [金関 1976, 1978] [国分 1992]。
- 2) 船は主としてパラオやマリアナの帆船様式を参考としている。すなわち丸木舟に舷外支柱を足したアウトリガーワード帆船である [黒潮文化の会編 1978 : 14-94]。
- 3) 当時の政治状況により、台湾領域内での実験は不可能だった [黒潮文化の会編 1975 : 3]、[藤本 1975 : 542-544]。
- 4) [曹 1988]、[高良 1993] を参照。
- 5) 筆者は、八重山の漂流記録に関する史料を読み解き、漂流地である「南の島」とは台湾を指すと別稿にて論じている。公的な往来記録がなくとも国家による介入という要素があるため、より大きな歴史的枠組みのもとで読み解く必要があると考える [黄智慧 1997]。
- 6) 沖縄については、戦後、馬淵東一により研究が進められた。馬淵は台湾、インドネシアに次ぐ、第三のフィールド調査地としたのだった [小川 1988 : 374-390]。
- 7) [Aarne 1987] を参照。しかし、Aarneは慎重に応用するよう指摘している。
- 8) [李維斯陀 1992] を参照。
- 9) [福田編 1984]、[福田・岩瀬編 1996]、[関 1980]、[伊藤 1991] を参照。
- 10) 山下 (1998 : 4-10) を参照。その内、朝鮮民族と共有しているのが21類型あり、中国大陆の漢民族と共有しているのは19類型であるとされる。
- 11) 与那国島の形の表現については、人によりそれぞれ異なる。[池間 1991 : 2] は、島をガジュマルの葉のようだと表現している。『与那国町勢要覧』(1993年)では、平行四辺形をなしているとしている。
- 12) 筆者は写真と8ミリビデオで撮影の映像を見たにすぎないが、おそらく台湾の東海岸、南湖大山付近の景色であろうと思われるが、実際に確認作業を行った者はまだいない。
- 13) 与那国島の物価指数は八重山地域では最高であり、那覇市を上回る [与那国町役場 1992 : 45]。
- 14) [与那国町役場 1992 : 6]、[黄 1995] を参照。
- 15) [牧野 1990 : 463-464] を参照。

- 16) 与那国方言は、母音がi、a、uという3つだけという特徴があるものの、多くの複雑な音韻変化を起こす。加えて、その他特殊な語法変化もあるため、言語学者でも重点の置き方の違いにより、与那国方言の帰属についても非常な差異がある。だが与那国方言と宮古群島、および八重山群島の方言が、互いに従属しない、同格の方言であることは、おおよそ合意されている。詳しくは〔加治工 1979〕、〔内間 1980〕を参照。
- 17) 与那国の中学校創立は明治18年（1885）である。当初は男子児童のみだったが、1897年からは女子児童の卒業生が誕生している。
- 18) 立命館大学、大谷女子大学、沖縄国際大学の合同チームからなる。二年目からは奄美沖縄民間文芸研究会がメンバーに加わった。詳しくは、〔岩瀬 1983:285〕を参照。
- 19) 方言と標準語間の翻訳や校正は、ほとんど地元の方言専門家である富里康子により進められた。今のところ唯一の完全な方言使用を記録した書物である。母語の保存という観点から多大な貢献があった。
- 20) 新里和盛の娘で、現在は与那国島民俗資料館館長を務める池間苗氏による証言である。同書で述べられている伝説は父である新里方が方々の土地の古老を訪ね歩いて得たものが多くある。よって、年代からみれば岩瀬の書物よりも古くなる。
- 21) 岩瀬の書籍にも「てだん・どぐる」と同名の神話がある。だが、人類南方起源物語の前半部ではなく、大雨が続いたというテーマが後半から始まっていて、竹や老人は登場しない。主に、大雨の後太陽に照らされたという、地名の由来を説明している。注釈では、物語の叙述者が「てだん・どぐる」はとても神聖な場所であると強調しているが、物語本文ではその神聖性についての説明はない。
- 22) 筆者のフィールド調査によれば、最高峰の宇部良山神を拝んでいるのだが、〔比嘉康男 1992〕の記録によれば、南方を拝んでいる。
- 23) 〔安倍 1933〕を参照。
- 24) 〔詹 1998:37〕より引用。
- 25) 〔石坂 1933:16〕を参照。
- 26) 以下は〔移川 1936:12-13〕より引用した。
- 27) 〔清水 1998:264-280〕より引用。
- 28) 〔宮良 1972:14-15〕を参照。
- 29) 〔喬編 1999:40,116〕参照。
- 30) わずかに1つだけ、パイワン族の伝説が存在する。その伝説の出典は、小林保祥、1935、「パイワヌ族の伝説」『ドルメン』4(2):8-13、東京：岡書院、にあるパイワン族クジャジャオ社（古樓村）のものであり、内容は「太古、一匹の犬が大樹と大樹との間に挟つて人間を生んだ。是れが我等の祖先である。故に今でも当社では、犬は祖先だから若し死んだ時は人と同一に取扱ひ、衣類、弁当、神饌、豚肉などを副葬し、ボヅトヴアヌ（犬を置く所の義）に捨てるのだ。若し其他の所へ捨てると、部落に感冒が流行する」となっている。なお、中国語論文では〔喬編 1999:167〕を引用している。本誌では査読者のご教示により、日本語の原文を注釈とした。
- 31) 〔移川等 1988 [1935]:513-514〕。

32) 本稿執筆時点では、口頭伝承は衰退しつつある状態だったが、最近になり、与那国島の伝説を採集した著作（安溪貴子・盛口満編、2011年、『うたいつぐ記憶—与那国島・石垣島のくらし—』、那覇：ボーダーインク）が出版されたことを付記しておく。

文献

安倍明義

1933 「ケタガラン族及びカヴァラン蕃とアミ族」『台湾教育会雑誌』373: 31-45

池間栄三

1991 [1959] 『与那国の歴史』池間苗（自費出版）

石坂莊作

1933 「ケエタガナン族渡来の口碑と作豚並びに作田に就て」『南方土俗』2 (3): 13-17

伊藤清司

1991 『昔話伝説の系譜』東京：第一書房

稻田浩二、小澤俊夫

1983 『沖縄、日本昔話通観第二十六巻』京都：同朋舎

伊能嘉矩

1908 「台湾と琉球」『東京人類学会雑誌』23 (265): 249-252

岩瀬博、富里康子等編

1983 『与那国島の昔話』京都：同朋舎

植野弘子

1981 「与那国のマチリと神器祭祀」『まつり』37: 82-111

内間直仁

1980 「与那国方言の活用とその成立」黒潮文化の会編『黒潮の民族・文化・言語』東京：角川書店、447-490

移川子之蔵

1931 「紅頭嶼ヤミ族と南方に列なる比律賓バタンの島々、口碑伝承と事実」『南方土俗』1 (1): 15-37

1936 「漢治以前に於ける蘭陽平野の住民：カバラアン族の歌謡と和蘭古記録に遺る資料」『台湾時報』196: 9-16

移川子之蔵、馬淵東一

1974 [1936] 「マッカイ博士の布教せる噶瑪蘭平埔族に就て」『馬淵東一著作集 二』東京：社会思想社、467-483

移川子之蔵、馬淵東一、宮本延人 / 台北帝国大学土俗・人種学研究室調査

1988 [1935] 『台湾高砂族系統所属の研究』東京：凱風社

大林太良

1993 『神話学入門』東京：中央公論社

小川正恭

南北文化の邂逅地

- 1988 「馬淵東一：「オナリ神」の社会人類学」綾部恒雄編『文化人類学群像3 日本編』京都：アカデミア出版会、373-390
- 小川尚義、浅井恵倫
1968 [1935] 『原語による台湾高砂族伝説集』東京：刀江書院
- 笠原政治
1998 「流人・逃亡者・捨て子：沖縄島嶼社会における外来祖先の伝承」大胡欽一等編『社会と象徴』東京：岩田書院、3-14
- 加治工真市
1979 「ニライカナイの文化の求めて」黒潮文化の会編『新・海上の道』東京：角川書店。
- 金闇丈夫
1939 「与那国島民ノ掌紋ニ就イテ」『台湾医学会雑誌』38 (7)
1976 『日本民族の起源』東京：法政大学出版局
1978 『琉球民俗誌』東京：法政大学出版局
- 鹿野忠雄
1930 「クヴァラン族の船及び同族とアミ族との関係」『人類学雑誌』45 (11, 12) : 441-444,
476-480
- 河村只雄
1939 『南方文化の探究』東京：創元社
- 簡美玲
1994 「阿美族起源神話與発祥伝説初探」『台湾史研究』1 (2) : 86-108
- 喬健編
1999 『台湾南島民族起源神話與伝説比較研究』台北：行政院原住民委員会
- 黒潮文化の会編
1975 『黒潮の民族・文化・言語』東京：角川書店
1977 『日本民族と黒潮文化』東京：角川書店
1978 『シンポジウム黒潮列島の古代文化』東京：角川書店
1979 『新・海上の道』東京：角川書店
- 黃智慧
1995 「東方海上的另類遭遇：与那国島與台灣」『宜蘭文献』17 : 1-11、宜蘭：宜蘭県史館。
1997 「人群漂流移動史料中的民族接触與文化類縁關係：与那国島與台灣」『考古人類學刊』
52 : 19-41
- 国分直一
1981 「台湾と琉球をめぐる問題」『エトノス』14 : 21-26
1992 「八重山の先史文化層」『北の道 南の道』東京：第一書房、247-258
- 崎間敏勝
1992 『先島の「島建て」考』那霸市：琉球文化歴史研究所
- 笹森儀助

- 1968 [1894] 『南島探検』 那霸：沖縄郷土文化研究会
佐山融吉、大西吉壽
- 1923 『生蕃伝説集』 台北市：杉田重藏書店
清水 純
- 1998 『原語によるクヴァラン族神話・伝説集』 台北：南天書局
杉島敬志
- 1981 「与那国島の「神の月」」『まつり』 37：37-70
閔 敬吾
- 1980 『日本昔話の比較研究』 京都：同朋舎
詹素娟
- 1998 「Sanasai 伝説圈の族群歴史図像」 劉益昌、潘英海編 『平埔族群的区域研究論文集』、南投：
台灣省文献委員會、29-59
- 曹永和
- 1988 「明洪武期的中琉關係」 張炎憲編 『中國海洋發展史論文集（三）』 台北：中央研究院三
民主義研究所、282-312
- 高良倉吉
- 1993 『琉球王国』 東京：岩波書店
中華民族故事大系編委會編
- 1995 『中華民族故事大系』 第二、五卷、上海：上海文藝出版社
張光直
- 1995 「中國東南海岸考古與南島語族起源問題」『中國考古學論文集』 台北：聯經出版公司、
171-188
- 鳥居龍藏
- 1976 『鳥居龍藏全集』 第十二卷、東京：朝日新聞社
波越重之
- 1924 「鎮台前噶瑪蘭の蕃務」『台灣時報』 54：66-92, 55：106-131, 57：61-73, 59：88-100,
60：115-144
- 原 知章
- 1997 「伝承の正典化：沖縄・与那国島の事例より」『民族学研究』 62（2）：147-168
比嘉康雄
- 1992 『巡回する神司たち（マチリ・与那国島）』 那霸：ニライ社
福田晃編
- 1984 『昔話の発生と伝播』 東京：名著出版
福田晃等編
- 1984 『竹富島・小濱島の昔話』 京都：同朋舎
福田晃、山下欣一、遠藤庄治編著
- 1989 『日本伝説大系第十五卷、南島編』 東京：みずうみ書房

南北文化の邂逅地

福田晃、岩瀬博編

1996 『民話の原風景：南島の伝承世界』京都：世界思想社

藤本和延

1975 「航海日誌」黒潮文化の会編『黒潮の民族・文化・言語』東京：角川書店、531-551

牧野 清

1980 「与那国島領属史の研究」『八重山文化論集』2：9-27

馬淵東一

1931 「スナサイとカバラン族」『南方土俗』1 (1) : 79-80

1974 『馬淵東一著作集 三』東京：社会思想社

丸山顯徳

1994 『沖縄民間説話の研究』東京：勉誠社

宮良高弘

1972 『波照間島民俗誌』東京：木耳社

宮城政八郎

1993 『与那国物語』那覇：ニライ社

森口恒一

1977 「クヴァラン族：その現在と歴史」『季刊人類学』8 (2) : 184-207

山下欣一

1998 『南島説話生成の研究』東京：第一書房

吉田禎吾

1983 『宗教と世界観学：文化人類学的考察』福岡：九州大学出版会

吉田禎吾、宮家準編著

1988 『コスマスと社会：宗教人類学の諸相』東京：慶應通信

与那国町役場企画室編

1992 『与那国町勢要覧』与那国町：与那国町役場

与那国町教育委員会編

1988 『与那国島の祭事の芸能』編者発行

1992 『与那国町の文化財と民話集』編者発行

李維斯陀（周昌忠訳）

1992 『神話学：生食和熟食』台北：時報文化出版公司

李亦園

1978 『信仰與文化』台北：巨流図書公司

1983 『師徒・神話及其他』台北：正中書局

1998 『宗教與神話論集』台北：立緒文化事業公司

1999 『宇宙觀、信仰與民間文化』台北：稻鄉出版社

渡邊欣雄

1985 『沖縄の社会組織と世界観』東京：新泉社

渡邊欣雄等編著

1978 『沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化：周辺諸文化との比較研究』、昭和53年度文部省科学研究費補助金による実態調査報告

Aarne, Antti, 関敬吾訳

1987 [1965] 『昔話の比較研究』東京：岩崎美術社

Cannadine, David, and Simon Price

1987 *Rituals of Royalty: Power and Ceremonial in Traditional Societies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Maranda, Pierre, and Elli Köngäs Maranda

1997 *Structural Analysis of Oral Tradition*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.